



和訓栞

世曾之部

十三

津田文庫
文庫 1
1604
14



倭訓栞前編十三

洞津 谷川士清 纂

世の部

せ 兄とノビハエト韻通モ今の朝鮮語ニセトワリトモク ○まをせと
 ノ六丈ハ長一婦ハ少一兄妹の義あり故をていせとワリ ○妹をせとハ
 延喜式ニモ女夫の二合字乃其方々一文字昏の本義ニ付あり付 ○背ハ
 せと通アリ身北曰背とミル ○俗ノ人の長短をうゑせとワリ背の義
 原一神代紀ニモ背長七尺餘方と見たり 安東郡沙汰文ニ瀧のりき
 さいりて勢をを用たり 異苑ニ田文啓又曰不舉五月子何也父曰生
 及戸損又と見たりこれハ生子如くしとワリ ○瀧ハ説文ニ水流砂上也と
 ころ背ハ肉の流る所をれ同くしとワリ ○古事記ニ青人草之落若
 瀧とつる緯をくく水浅くそ舟がひりたは喻へく神代よりかくハ
 ちや終らるるを瀧と見ん重敷くき漸くき漸くけりき漸くしとワリ 俗ニヤ
 漸くしと見ん漸くしと見ん是也とワリ ○端を日本紀ニセとモ

倭訓栞 卷之十三

松文庫

010190596600

たきもくもく 説文は疾瀨也と注も新撰字鏡は儵瀨とをなせとく
終山のだまの形もくもくをあり○灘をかきと訓されと増韻は瀨と
凡く新撰字鏡はつとせとかりとせとくもくもく七里灘を嚴陵瀨といふ
夢大明一統志は出くちたせとくもくもく新古今集は貫之曲水乃宴
てに月入花難暗といふたある坂上是則

たきもくもく 花入月くけのうねくへのかかまを

此時の壬生忠岑は終に新拾遺集に入てそれとせとくもくもく題乃勺白樂
天の詩あり○畝とせとくもくもく唐土の歩百為畝といふと
今一畝といふ三十歩也十畝を一段といふ段十七間三人す四方といふ○
石華をせとくもくもく和名鈔はもやま貝の名也今せつといふ俗絲龜
乃も又鬼のも又鶴の爪又烏帽子貝といふ松岡と羽の説は石脚一名龜脚
といふあり○仙貝はかき貝といふ石華をくもくもく○倭名抄備中国下
道那は弟鬚をせと訓せし弟を神代紀はるせと訓せしとくもくもく一鬚はせの
韻也紀伊の伊乃や東鑑は備中国妹尾郷といふ妹をせとくもくもく

例なり 妹字の誤なり 同前あり ○為とせといふと反されたり
せあり ○諾字をいひ日本紀はんて後撰集乃詞書ありいふとせは
ん今といふせの音信ありとくもく ○狭といふはさの形ありとくもく
乃れなり

△せあ

△せいあり 細男と書り春日若宮祭の供奉人ばかり名はくるものなり 巨帽
子素襖をよき舞踊といふ 細男舞と奈良舞といふは宇佐八幡縁
記はんて本朝文舞の對に神樂之雪夜雖短男之輕身といふとくもく
同音なりとく ○細の廣韻は音替といふていひの音なりはたはさといふとくもく
異音れを呼ぶや日本紀もての音に用たり

せいもん 通鑑唐則天紀もて誓言文也誓詞もて誓約の文をいふとくもく
起清文もて誓言の唐僖宗紀もて誓言の晋高祖紀もて誓言の○京
師もて四條京極の悪王子の社に依る誓言文拂といふ十月廿日也此社の熊野
街道の王子此也素盞鳴るの元はる事ありとくもく

子と稱し年長り清年弱く時の子を成りて尉者敵の号あり

せいのい 成敗の字出師表小凡く今刑罰の事ふいふなり ○喧嘩両成敗といふは時頼の子時宗の世より始なりといふ ○清成敗式目五十箇條貞永式目より武藏守平泰時の造る名法海云の律令よりなるといふ東鑑より云ふ

せいひやう 精兵也也弓手なり我邦弓を以て武器の最も善む武術を弓矢の道なりといふ意あり東鑑より云ふ ○良基云の記より云ふ乃精兵といふなり

△せう 倭名抄は信信は雄鷹謂之兄鷹雌鷹謂之大鷹と云ふ也またの義より鷹の音略なり大鷹は今大の音なりといふなり ○源氏物語は是鷹の法を以てする也古御府は鷹則鷄の兄といふなり ○源氏物語はさうやうに云ふ兄弟鷹の法なり

せうと 見人也後拾遺集信信は信信なりと云ふなり ○信信は信信なりと云ふなり 信信は信信は信信なりと云ふなり

消息の音信也と注し白氏文集は先令和風報消息と云ふなり ○又継業も注し信信は明衛継業尺素往來有て信信なりと云ふなり

せうと 年中行事并合注信信宣命の事なり ○信信は信信なりと云ふなり ○信信は信信なりと云ふなり ○信信は信信なりと云ふなり

△せかい 背棹の義又万葉集に雲霧をそらひの足信信と云ふなり ○そかいの背と云ふは世を通着也盛衰記より云ふなり ○信信は信信なりと云ふなり ○信信は信信なりと云ふなり

せかい 信は賊息の事なり ○信は信信なりと云ふなり ○信信は信信なりと云ふなり ○信信は信信なりと云ふなり

信は賊息の事なり ○信は信信なりと云ふなり ○信信は信信なりと云ふなり ○信信は信信なりと云ふなり

△せき 園とあり傳多沙よせとあり園門の義也古名伊勢物成り
 塞しとあり人成防とありの義也割之割園一伊勢物成抄ふと日本紀略に
 相坂割と書やう史記に蜀割道正字通に割俗俗接といふ也今義解に園者
 検判之處割者塹柵之處と云ふなり ○後日本紀に伊勢志摩西國相事於是遷
 扈衆割於葦洲と云ふ扈衆今渡會郡の阿衆といふ村あり葦洲は同郡の押
 洲狹といふ今園堺の標とありなり ○今園との呼稱は伊勢
 鈴鹿郡沓麻山の東也東濫は若菜立島園の小野は斬と是也園氏の平賀
 盛子盛園の後也 ○園城は孝陸園あり源親房の保ちし所なり園戸は武藏
 野小山田の園の故趾也といふ義久官軍の將小園氏あり ○法園園多しといふ
 といふなり園といふを相坂を指すといふ園所の園寺のありといふ園山は園乃
 小川をいふ也此園のありは四のえといふ禪院といふ世業人ありは伊けり
 延喜長甲のえおねとさつと長明東紀行に云ふなりこれおねは園の流
 水の多き所は其より流れるなり ○焼物のかけきき用る石をせきといふ
 清水流のせきの鴨川あり信樂流のせきの田よりあり

せきはる 又素継来よ坂後園後と併りけお合右張と云ふお富具教卿此記に
 軍陣の旗一袋十二節右邊お園之産物也と云ふこれ伊勢沓麻郡の後と園と
 あり割といふなり後記に西土ありろふ矢と云ける事後園といふを云
 かりといふ或は御旗と云ふなりといふは此の流るなり

せきせん 園錢の前後醍醐天皇元弘の初より大津葛原支園の介ありての
 新園は皆廢したるなり此世及いふの境は多く園をいふは河川へ奥列乃
 大園をわく往來の徑路を取て寺に細めけかこむ後園後守といふ天正中秀吉
 公東征よりおをさるる園後皆廢せしむると今津四家合考に云ふなり

せきりねな 清見浮園宮流といふ清見の山の下城通る流のおか
 ありとて流るなり通るゆゑと云ふなり今の上城方城通るなり
 △せき 弁はせきかきとせきかきと云ふなりと舊事紀
 小塞ふの訓なり田小水をせき入るなり ○狭乃義ありしをせきかきとこれ也
 ○咳は聲音の塞るなりと云ふなりと阿波は咳と云ふ中ふと云ふなり
 と云ふ ○咳はねと云ふなりと氣のいれるなりと云ふなり ○咳は流るなり

賤多死といふの三代實錄なる也

せくつ 新撰字鏡は儂又降答と訓なりけり嘗也くつ(日本紀は儂儂とくはまといふ)

せくまゆ

詩小局字と云ふ文選は獨天と云ふなり嘗屈する也また本集に久々なるはみよへたのけきとせぬくめてう我るせり云々

△せけ

△せこ

兄子と云ふ吾兄吾兄子との君なりけり多くまぬらしてけり親と云ふは初めはく夜通姫は天の命に我せよと云ふなり今又親族朋友のる男ららけり云々事方本集に云ふなり○弟子に對してせりてあり古事記は兄子とも云ふ若妹よと云ふなり故はついでと云ふは多けきせりはまといふくは夫婦は通する名なりといふはありけり今集に貫之の昔せこう多うふ兩いふは女のよらんをいひかせり奇也といふなり○西都賦の列坐とせりといふなり貫之の昔と云ふり通鑑は獵團と云ふなり東鑑は勢子と云ふり万葉集は云ふなり一ははけ候の昔と云ふり龍山の

乃使小山とがまのてん押出せしといふはなほけしとの將を若くしとの也下將家といふは事なるをてんといふなり○唐初にせしといふはなほけしと云ふはなほけしといふは三條一統は云ふなり○鄉村の小名は云ふなり勢子といふは出づるなり○信房山田の小孩をいふは迫竹をさるなり

△せいめ

貫之集に云ふ前裁合のさかるなり日本紀畠延喜元年

△せいじ

今字使字教字碑字なり公よりありありけりいひの昔也凡てを万葉集に不冷見と云ふるの昔也教をいひは俗也較と通し用遣と云ふは俗也諸相家小用といふなり○日本紀は王子と云ふなり韓語也

せくまゆ 蜻蛉日記に云ふ源氏はせんせり云々なりはせんせり云々なり軟障と云ふ軟音善也云々なり小東之條ありしはさか野はかりなりか將をかくれしと云ふは昆明池の障なり乃裏松也野をかくる方に松ありといふは三代實錄は紫宸殿の軟障と云ふなり細流はけり障するなり云々なり世といふなり○七修類稿は古有硬屏無軟屏軟者圍屏也圍屏與泥金條

漆皆出于日本と云々なりこれをも今のたも屏風なり今一任吉物に云々
ふと云々西土のまを紙屏あり

△せと

△せと 膳所を云々青の物記也り庭州往來も膳所基竹と云々膳
所にて云々あり今道中の地云々あり ○せと云々の細螺なりと云々
持く膳所貝の云々と云々 ○小兒の儀は錢云々あり

△せと

乃足冷してと云々今房室の斜障を云々なり ○伊勢のふ田云々
小の云々水の流るる云々あり ○伊勢のふ田云々あり
と云々の所あり

△せと

△せと 蛭諸也耶蘇をいふ也又せと云々あり

△せと

△せと 宇治拾遺云々あり又云々あり ○せと云々の書
禱乃云々あり
康富記云々あり

△せと 俗にせちのあり人云々あり ○せと云々の書
つら切字の音也と云々 ○今つら切字を云々あり
つら切字の音也と云々 ○今つら切字を云々あり

△せと

△せと 是定の云々也攝家衰微の後長志の云々ありと云々
を云々あり云々氏爵は云々是定は云々は云々云々
家小修らるる云々攝家の皆其云々属たり西宮記云々氏定と云々
通云々云々云々の下に云々ありは次第は中納言橘澄清以中園白為是定
也と云々云々此義あり ○小右記云々王氏是定と云々職原抄云々
源氏藤氏橘氏有姓号王氏者往古之例親王為其長と云々云々是定は氏
乃長者

△せと

△せと 今義解云々尾丸にて云々使との執り也今云々刀劔を云々

△せと

△せと 今義解云々尾丸にて云々使との執り也今云々刀劔を云々

△せと

△せと 今義解云々尾丸にて云々使との執り也今云々刀劔を云々

小代ふ故子節刀といひて凡そ一柄華葉葉子節刀者雜劍也其中靈劍有二柄是昂百濟國所貢進日月護身劍破敵將軍劍也といふも温明殿の大刀節刀ハ天徳の災ふといひぬ

△セト 縁をいり杖鐔の首をうへー○人々をりてとて説破の字也

セツク 節供をり延喜式に凡そ一柄晴蛉日記枕草紙等ににせくといふ也佳節の供御といふ語ありと信子節刀のこころより西土に節御といふ俗語ありと

セツク 説經の藝苑供奉志にありと法師の中小妻を尊むる説經師といふ者ありて佛法のたふした事といふ初は信子にせくといふ世の事あり若お徳をのてふいひはけてといひ元祿の以の事ありといふ安右院の澄意三井の定田といふ

△セト 神代紀の首にあり万葉集に海門迫門とあり孝小遊人といふ同

陶器をセといふとい呼尾張の瀬はたつと多く獲野といふよりのもありは昂を祀といふは四布ありとかる四布といふ叙の乃元入宗の時子同くありて磁器と制といふといひたり後和坂といふ春慶といふとて祀母徳有といひ跡玉

△セト 袖中おは後の門をセといひてつり背門の事あり今にたてて

つりといふと通あり

△セカ 万葉集にあり君長とまをいひたり見名の事あり一木本の信

今もいふと信あり

△セカ 錢乃者公情也といひり金銭銀錢銅錢日本紀にありり因家

經といふ銀錢也今河本泡人といひたり又金銭あり○錢文小寶字と用る

ハ開元通寶といひ始と通鑑書にありと年をいひて文とすハ劉宗孝建の四

錢後より起り○表の方を錢内小とてハ東周かといひ表と錢内に

ぬるといふ東玉にたると云○朝鮮玉に孝平通宝の大錢行り○錢り

た錢にありぬ錢といふ○右錢新錢の孫ハ南史にあり○白臘錢銀錢類聚

推要にあり○安徳天皇涉地生の時小松大入金銀五十九文を皇子の湯花小

至せりといふ平家物語にあり○謹上泰山府君都収銀錢二百貫文とい

朝野群載にあり○泉志に老父文公傳にあり○本朝通鑑小應永十

年

△セト 孝小遊人の隣小祀母徳有あり

△セト 袖中おは後の門をセといひてつり背門の事あり今にたてて

つりといふと通あり

△セカ 万葉集にあり君長とまをいひたり見名の事あり一木本の信

今もいふと信あり

△セカ 錢乃者公情也といひり金銭銀錢銅錢日本紀にありり因家

經といふ銀錢也今河本泡人といひたり又金銭あり○錢文小寶字と用る

ハ開元通寶といひ始と通鑑書にありと年をいひて文とすハ劉宗孝建の四

錢後より起り○表の方を錢内小とてハ東周かといひ表と錢内に

ぬるといふ東玉にたると云○朝鮮玉に孝平通宝の大錢行り○錢り

た錢にありぬ錢といふ○右錢新錢の孫ハ南史にあり○白臘錢銀錢類聚

推要にあり○安徳天皇涉地生の時小松大入金銀五十九文を皇子の湯花小

至せりといふ平家物語にあり○謹上泰山府君都収銀錢二百貫文とい

朝野群載にあり○泉志に老父文公傳にあり○本朝通鑑小應永十

年

年初國寺僧中正藏至又名仲芳尤善楷書明人謂書法身一合書永樂通寶錢文今所傳于天下錢文者中正之筆也... 〇日本錢永和饒益長年延喜の扱ふ其作ふてらひ... 〇異邦の貨泉よりとり駒を鑄る多し我國の駒壹錢といふ... 〇武備志に日本總錢千一絲... 〇阿堵物公譯

倭名抄に鏝をとりり錢貫也と注せり... 〇武備志に日本總錢千一絲... 乃九十六文と同く省百也... 唐昭宗の末八十錢を陌と

五代は七十七文陌とせり... 東錢西錢長錢をこのりるが... 津逮秘書に尺五土佐の八十文を百と... 倭名抄に紙錢をとりりかきせり... 今紙切乃幣といふ是也

神宮古記に銀乃錢切をとりり... 鼠璞に紙寓錢亦明器也といひ... 家禮に漢以來里俗稍以紙寓錢... 天工開物に盛唐時鬼神事繁以紙錢代焚帛故... 屏風に錢紙あり類聚雜要に

姓小妹尾とすり... 盛衰記に尺五備中の名也妹尾の東漢より是を... 校證ととりり... 〇同類通也... 編の衣服

△せいえ 舞乃服より倭名抄に唐令を引て接鞠と云し此間ニ云
接腰と云しあり

△せふ 少輔乃らみくせ也

△せへ

△せろの 警をいふ者皆せしむ

△せま 日本紀に鴻をより韓信なるを今乃朝鮮海にせむと
いふも○和蘭言のらんを帳夷言乃を並み作をいふ者汝らみらん
この地方に夷信なる也といふ

せまか 日本紀に急又窮き窮達をより源氏にせよりなる大子
乃をるより除目四品の籍より内堅の窮者よりあり列子小食
者士之常也といふよりまる及びせむと同也又逼迫迫促慶より
はくこと也

△せみのへ 倭名抄に蟬翼と云う羅をいふ事不せこの名ふといふ也
晋抄にいうるをたすしの熱名といふる藤原系よりすしあそといふる
名なり

只らりのすの衣といふはありといふ

せみく 嵯峨天皇の法号不豊田麻呂善輝教と云ふなり
紙にせみくをいふなりといふことなり○方丈記に蟬丸の事を輝
教の字なりといふなり教寧親王の雅名にて合はし隱居と博雅就て琵琶乃
紋曲流泉啄木以傳や江詠柳よも後撰集のくわけの蟬生ふゆと云
を記していふ事いふなり清政集に

あはれの園はよ年のたぬと云ふものなり名をな流さん
こゝより所めさる

せみとま 鳥羽院乃時西よりついでせし等の名めて糸乃形蟬と云ふ
りは後得くま蟬を指しぬりて名なり○鹽表記にんくとも倉名
圓城寺とて吹世は是也又今の糸乃蟬といふあり

△せじ 攻を責を神代紀に噴字讀字制をいふなり靈異記に寤とせむ
るといふるをいふる及びせむといふる同なり○同記に促又逼又急又
約といふる山家集に

山川のみるさる水乃音とけんせしる令とねりひまらぬ

温槃終子人命不停速如山水とつる也○讓をせしむるといひ説文は讓相責也といふ也

せん 為字の誤りなりせん及す也○みせんさるせんさるは万葉集に令親令徳

かきまき○馬乃をけむけの錢を音あてりつり○口語は押のせん

とつりといふを專字の音を呼なりなり○せんをさるるといふは桂字のあかし

さくたといふは音也といつりくさびと同一○あか刺る具といふは鐘也といふ

○せんまきまきといふは線字なり線蘿蔔の糸あり○團茶といふは先の音

もひつり唐唇朱金忠先手通監正誤又如葉恭之先手也といふ○せんの有まき

のまき詮字也字彙は擇言也といふ

せん 膳の字は小具食也といはり西土に膳をいひるは靈異記に膳をよま

くひまのといふり飾鑑刻同一三本迄の法帖六本迄の法帖なりといふ

せんと 踐祚といふは景行紀にやうり祚に祚をいひ祚を用はれり令は

即位就踐祚といふは同類の語とさくともいふは入差列をいひあはれ踐祚といふ

あり即位といふは饗食なり在位といふは位をいひたりせんは讓位といふは崩御の後
後には位をいひたりせんは踐祚といふは式正の即位といふは即位といふは後
栢原院踐祚といふは二十二年の後大元元年の御即位の礼なり西三條實
隆は東本願寺の頭如を議りて費料を出さるる頭如を大僧正に任し門跡に
准は後奈良院踐祚の後十一年天文五年に清和院の礼あり大内後隆實
科を奉りて大宰大貳に補せり正親院乃踐祚の後四年永祿三年御即位
位の礼あり毛利元就費科を奉りて大膳大夫に任せり嗚呼衰乱の世り
遇給ひ非常の事あり

せん 播紳家乃官途の抄をいひるは吾家との先例ありといふは先途といふ
揚巨源の詩は青雲依舊是先途○俗に物も先途といふは先途といふ
ふくのこと也相模はたつと常陸はたらく信列上列より上総といふは遠は
ふくといふは東はふくといふは仙臺といふは肥前といふはつとつり
せん 日本紀は宣旨といふは宣旨といふは宣旨といふは宣旨といふは宣旨といふ
小宣旨國宣旨の用あり王建の詩は琳時玉案呈宣旨といふは宣旨といふは宣旨といふは宣旨といふは宣旨といふ

目乃注日天子命謂宣旨又曰宣命上卿より出日口宣業を大外記より
 出日て文書以宣旨とんてこれ口宣宣調頭辨を送る頭辨より官
 小任する人の許ははらう也○内覧の宣旨といふ奏聞も是なり宣旨
 以内覧をこの宣旨以書あり也○使の宣旨は書ありといふ檢事遣使
 をいふなり○すんでかきといふ宣旨書の也今いふおかせありといふ
 ○女官よりいふ原氏は春まの宣旨ある内侍のまけといふ宣旨は内侍
 兼る人なり○生精の祈りといふ撰案とまけ生糸の精作るなり
 せんさい 舟の初出をまけま名伊留物内前裁とまけ庭前のままぬの
 後といふくま名なり
 せんさい 宣制とまけ制をまけいふと制を詔令に宣後むる也宣命を
 後の徳公持て宣制とまけ宣命とまけいふなり
 せんまい 洗糸のまけいふ水の音也
 せんまゝ 宣旨は文をむくも是年中行事舟令の注日天子の詔と百官に
 命を天より下小傳に傳ふなりといふなり詔令は宣旨は徳以宣令といふ

古の後の事ふく詔とまけ宣命といふなり○宸筆の宣令は條院より
 始る神鏡災よかまけ大徳宮に書たる時あり○宣令紙は伊賀へんか
 乃紙賀茂尾の紅梅をのびか書たる紙也○白紙宸翰の宣命神前焼せり
 せんまい 万葉集より此條多く日本紀に不知所知或は不知所圖式と
 厩身無祈といふせんまゝなるといふなり
 △せう 鉦子やふいふ通のまけいふ入筆はいふなり又るわふ一のせり二のせり
 とつちのりちまかの梅二の梅とんていふなり
 せりこ いとせりてか切るる洞といふせりての彫りて神代記は徒とせり
 とより霊異記は迫固拾ま集に年を人せりていふなりとんて源氏ゆを
 年いせりていふなりと小ぬぬをせりていふなり又同○すむかま
 かりしりせりていふなりとつちのりちまかの梅二の梅とんていふなり
 事なりといふなりとつちのりちまかの梅二の梅とんていふなり
 せりこ 関守といふなり詩経に兄弟閨牆といふなり及むせりて同も是なり
 宣鏡は銀といふなり古今集に

たねとくるとのつらむせうとけん老ちんちんわんわんぬ
いせりさうらんまきあうんのあせとあせあせのほなり

△せし

△せやぎ

折撰字鏡小園とらうり

△せし

△せし

△せし

△せり

訓と音あつ助傳まつちやうみー也於て集に八十氏くしぬ
せつとらふといやうぬーとめりる也万葉集に為有とちり又とらふと通を

○芥沢川を神代紀よりとんていへば一所せり合てけらるゝとて
名とせり也川せりといふ水芥也大せり漬芥也三葉芥ハ野蜀葵也といふ

○秋人根せりと移するハ根の表とていふと也○とらせりあせりハ新古帖

ふうとらせり又節とらといふも早芥也昔花のものけ毛芥とら○倭名

所高麗樂曲ハ勢利あり○せりハ名所の南ふありとておあり○阿蘭陀とて

芥はさうとらといふ○もせりハ芥の下品也

△せし

倭傳よりせりとの略けらるゝ○脚注といふせり及す也万葉集より

釣為燭有以はらふとていふとらうりも何及と也○高貴法よりといふも同と

わらうり

△せし

施料とちり儲物施料とてつけらる布紋の系也或ハ又世糧

とてかちゆり

△せり

度刺律身といふ織羅葡を謬とて呼らるり大根をいふとてん

小切とら也

△せし

下学集に世話ハ風俗の御法とていふ一説ハ説話とていふ

△せぬ

△せぬ

△せぬ

背負の羊換を訓とらといふも素直とせしといふも芥屋のちんちん也
四國長崎はかりといふ

老ねくくるをくわりのあせうとけん老ちひたりけり

信言 五ノ一

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

曾の部

そ
 上よおくつふれどくうけよまぞとつたつ小五音并三の韻うてま
 いた借乃例也又一ときうてまうりてせへ強く押つてまをてと
 て疑ひうるありたがらぬの衣うけ一を幾世まひてま水の分その衣也又よ
 々といふまをを禁止乃辨小用のありあり古今集
 山吹るあやかく候をむんしと極々人の今有るま
 ○十とよひい五十四の衣有り ○麻をよひい総麻の衣有り又その衣ま
 綿をよひい割て用るをいふ河也とまうりててまぬひをかまうりて朝野群
 載は斐麻百斤穀麻七十斤とまうりて ○彼をよひい彼處然くの衣とて後
 を同一身にせぬ衣をくそをうりてまをうりてまをうりてまをうりて ○替ま
 替をよひいせと通る ○衣をよひい身小條の切るまをりてと祝詞は服を
 うり ○龍衣のよひいまの衣有り一姓氏録序は天孫降襲西化之時神
 武臨夏東征之年懐風藻序は龍山降躡之世檀原建邦之時と二肩板
 点誤る龍衣日向龍衣高千穂之山峯以謂也又姓氏録序は皇統孫照聖明と云

妻則 夫

マハ柏原天皇以申奉る也○万葉集よ烏がくろく瓜その略也○石
とよひ近江の奥名の終りいその略なり○穀子の名とてる後氏よ
いひてとてとる是也終名院吉野指記よ酒まひてとてとる
そく乃略なり

△そ何

△そつり そやつの柄そやりの甚奴のそとつり

△そつりや 諸國は總社あり或曰古者國内必建總社有事于國司官社別

國司率僚屬先修典禮於此其儀如京師神祇官河内乃惣社ハ國内村り
あり候留の惣社ハ鈴鹿郡國府村あり播磨の惣社ハ姫路の城内あり
○奏者の終ハ僭の甚きものと

そつぞれたの 物作はそつり裝束迄のそつり音の儀と活用をハ儀
樂とそらかの儀作は料理とそらつりつりつり

△そ代がよ それ代がよ乃そとつり

△そえ

△そがひ 万葉集よ背向とつりしと略しつり河也又背上とつり○伊
縁の儀流り義通と

そらきく 袖中抄よ兼和對也とつり神樂身の中かのと清和井とつり

がゆー貞徳統よ十日菊也とつり鄭各詩よ十日菊の影あり九月ふ対
つあり一統は背向の菊也とつり○兼和帝ハつり其也瓜好す瓜
たすよ瓜よ兼和帝ハそらつりつりつり西つりつり騷客の妻とる和兼

用小入るりそと貴と解芳譜よも菊大要以黃為上とつり

△そき 祝詞式よ退る瓜とつり今のくつり通つり日本紀よ路傍とる

乃そ紀とよみ後廻とつりつりそとつり万葉集よ山のそき野のそき
牛糞文よ孫乃そとこの國とつりつりつりつりつりつりつりつりつりつり

ふかつりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつり
そきつり 万葉集よつり殺板乃そと板とつりつりつりつりつりつり

そらへ 万葉集よつり退るのそと遠隔とつりつりつりつりつりつり

そそたく 万葉集よそそこけくといふなり

△そぐ 殺をとり降殺の義通と義通つり又鍛とよめり文選よそぐはくも牙瓜そぐやくといふ例今昔物語よそぐり鼻瓜そぐの割身瓜そぐの刺也○竹ま瓜そぐといふ瓜同く扱とよむ古来千木片扱るかぎり刺と通せり

そくび 豊大園乃制れよかりけそくび様物とてそくび今禁中よそくびの上器あり徑四寸許その用稀也或ハ寒鼻とよみ海人落芥りん也○著聞集よそくびつとてけつといひ今昔物語よそくび狼籍也外頭つくとてつり○相撲乃手よそくびねつありそくびちけあり

そくろ 人よそくろ瓜かたのつとてつり囃路の音よそく囃託賄賂と合せつとつるや源氏物語よそくろとてそくろ財抄よそくろ官位よそくろまゆめつとつり又續紀よ侍額外散位輸續勞錢とてそくろはけとかりん也○足爐行厨集よそくろ江次第よ續飯とつり埃囊扱よ粘飯とてつりよそくろ

物よそくいといふも今俗よそくいといふを執とつり○談板よ北山抄よそくい○そくふの詞も母よりつり輝かそくふるといふり

そくさん 日本以東方粟教國とてかへん言釈書日羅の傳よそくも佛氏の教伝かり百國よ足よそく二百万以下粟教國とてつり仁王經よ中下品善業教王天台疏よ小玉衆多猶粟教とてつり

△そけ 竹木刺とそけのたけとつり殺る矣よりつるぬへり○そけといふ殺の意とて或ハ尖るなりとつり

そけん 疎給に表代の事なり地地と給よゆかをの種也表代のことハ之元院の記よそく宮寺なり其の傳也とつり○素給とて言信家なりふつとてのそけのゆへ

△そこ 神代紀よ彼處はみ万葉集よ彼所又其處をよつり○物治をそこふ対とてつる足下の音ありとつりこれ處を対とて和傳也○そこよそこよちり

信言集 卷之十三

底ハ極のこゝ方章
我底ハ底よりなり
又紀ハ底空も

倭言集 卷之十三

○底とハゆい彼處と到底乃為底なるゆゑ玉危無當乃當りて通つる正字
通ハ今俗呼底為當と云ふなり ○倭の底ハ雅俗の者多しゆり 底地的三
字ハ以て其指の初より元來一字也 何ぞ其ハ略して考しつハ考すれハ底也
底を以てく的ハ小字句讀ハ底音的と云ふなり ○塞と云ハ日本
紀倭多抄より云ふ桶のそこを以て用ハ底より始まる例也 壁ハ壘と
同ハ城廓垣牆よりなり ○高士傳ハ履有上无下といふ此下ハ底也履の地より
なり

そこい 万葉集ハ天地乃そこいのうらみなり根りといふなり底ハ
其同なりヤ古今集ハそこいハ今記よりハさつといふなり今ハ其也
そこわそこいハ水ハ淵也紫式部日記ハそこいハ水と云ふなり
そこいハ水と云ふなり
そこら 日本紀ハ若干と云ふ河海ハ日本紀と引テ幾多乃字と出され
しハ其ハ一其所等の義也
そこもく 日本紀ハ若干と云ふ韻會ハ就言幾許也といふなりそこ

そこら 如干如許許多居多も同一世説ハ諸許といふ
そこら 神代紀ハ傷又損と云ふなり其の義ハ一強又害も同一古
今集ハ其の義ハ一強又害も同一古
新撰字鏡ハ弊をそこらといふなり其の義ハ一強又害も同一古

△そこら 榮花物語ハそこらハ鹿柄と云ふなり其の義ハ一強又害も同一古
△そこら 神代紀ハ齋宮ハそこらハ新撰字鏡ハ晦をそこらといふなり其の義ハ一強又害も同一古
傍肉の義也ハ其の義ハ一強又害も同一古

そこら 詆毀と云ふなり其の義ハ一強又害も同一古
新撰字鏡ハ唾ハ其の義ハ一強又害も同一古 ○名ハハ人をそこらといふなり
諺ハ許魯齊ハ其の義ハ一強又害も同一古

そこら 倭名抄曲調ハ蘇志摩利ハ其の義ハ一強又害も同一古
其の義ハ一強又害も同一古
十代田ハ其の義ハ一強又害も同一古
其の義ハ一強又害も同一古

△そとつ 新撰字鏡は總て入り入るるも入り入り亡殺也と注せりその
殺の字より川に於てや今もいふことありし

△そせ 井宮のてかくせよとてさきとを思ふまじり

△そく 日本紀は彼は茅原とて舊事紀は曾の登健とてより公の茅
蓋をいふより人しそい茅のおうや聖異記は動をそくともいふことあり

蜻蛉日記はゆきよふ人の声をとれんとかとのいふまじり入るるも今もそく
くといふ何れり源氏はそくやといふ詞花集は萩のそくも秋風吹ぬなりと

いふそくもそくも通へし指月菴の説はすいといふゆりの詞ありといふ○楚の
名目抄は群やうる衣路ともいふ詩経は出○よふとて女陰をそくといふ

そくは 祝詞ふれあけるかやの標注は古語云々蘇は伎といふよりかやそくは乃
ゆきよ高菅といひて屋をそく草かり源氏はそくといふことありそくは乃

るそくといふ今も乱れそくけりいふそくけりといふことあり○そくはすきと音
通るる流るるそくそく嶽あり嶽の上は大野あり是神功紀はゆきよそく野也

今も大芒をそくといふ○倭名抄は飛廉草そくは又あつてそくといふ

今つ鬼の扇といふ也○そくは源氏はそくとも兩乃麗きなり

そくは 源氏はそくといふそくそくとも神代紀は激越激麗のそくとも万のそ

集は石激といふそくといふれと紀はたゞる集はいふそくといふと後へ白玉代紀

ふ麗後とそくといふそくといふ麗字激字流字をいふも同一新撰字鏡はゆきよ
といふそくといふと普通つ洗滌濯盪浴洒といふも友用といふは

そくは 坐字はゆきよといふと通ふ何のそけるはそく也文選を善注は無故自指
曰坐指といふことあり或は無端といふも請字請字をいふはゆきよといふ所

そくはハハも同じ也遊仙窟はゆきよといふも又坐下山東はゆきよといふは
かたはゆきよといふかたはゆきよといふも又坐視其死なく袖手といふはゆきよ○そくは

ゆきよといふと本と二をいふも或は謔語といふも今訛をそくといふはゆきよ○そく
ろがゆきよ山衣はゆきよといふ源氏はゆきよといふてそくはゆきよといふも

そくは 徒然草は髪をゆきよといふもける及くそくも同一そくはゆきよといふも
俗まつりり文選は編をゆきよ新撰字鏡は髻がゆきよといふはゆきよといふも

そくのゆきよ 源氏はゆきよといふはゆきよといふもけるゆきよといふはゆきよを擦

とてこれに後家の事とあるあり

△そと 袖守抄は後の門をせしむといふ事あり今後門外をさへて
てそとつらう背門の事なり西國よりつらき日本紀は外をあらしといふの
事なり常陸奥羽といふこと外端の事なり上列房別といふこと○本紀
少き事ありといふこと○の事なり今その事あり古事記はそととさ
たきといふ事あり

そとり 日本紀は山陰を背面といふ事あり万葉集は背なくさう背
津面のみなりかげといふ影津面よりつれ及と背面の國は山陰たり
事あり北山抄もさるといふ事あり○新よそといふ國をさるとの野辺そとの答
あつたといふ後世外面とある事也

そとりひめ 日本紀は弟姫容貌絶妙其艶色徹衣而冕之是以時人
号曰衣通姫といふ事あり元泰天皇の妃也明衡往来より衣通姫といふ事あり
○古事記は輕太郎女の別名をせり万葉集も同く元泰天皇の皇女也
○平相國清盛の女を相國戲と衣通姫と傳ひし事盛衰記にあり

△そとふ 古事記より備字供字具字ありふりたりとある事ありといふ事
及ふ也そとふといふ事あり及ふ也自他より別也○顯宗紀は新嘗儀にそとふ
といふ事あり新嘗祭祝詞は後には物を備奉也といふ事あり今も神は也
奉るはそとふといふ事あり備字供字具字と供進といふ事也

そとふと 副助の事といふ事あり○そとふは破別社の事ありといふ事ありと
とと同き事ありや何れなり
みづの、きさ山けふさるぬいく林はそとふといふ事あり
そとふ本といふ事あり藻津原あり生傾といふ事也といふ事あり
○そとふといふ事あり一程の松といふ事あり京師といふ事ありといふ事あり

△そとに 新嘗祭は鴨と訓せりといふ事あり同くは鴨が松記にそとに
和名ありといふ事あり古事記のそとにといふ事あり○和の名あり
といふ事あり大和より多郡あり

△そとぬ 助徳といふ事あり及せ也万葉集にあり○姓といふ事あり

そ古のむくし式和泉和泉郡一曾孫の神社あり○長曾孫大曾孫なりし
の姓あり○曾孫好忠をる丹といひ丹波掾に任せられた也○新撰字
鏡に確をより又やとつるころうもよりありの多むけはふもやらもや土
たのたそ孫の堀字をより堀の道上加はと注せね河あつそいすと通と
とよるもやめし

そ孫や 娼妓をいひ傍姑のふめし日本紀は娼妓よりり精し同し万葉
集に娼妓を孫とのこしよりりこ

△その 其の指物之辞し注せり厥の爾雅に其と訓す日本紀は彼字とそ
乃とよみ其字はかのとよりり相通ふめし又其を助辞又用わし辞は
ふしよりり○雨時又百爾君子なりふ爾字はふむの指物なりぬもて其訓
すその也乃と同一○園をよりり背野のふめし後園なりといふこと
菓はうふなり苑を獸を好ふ也○園田はいつる字後漢書より見ゆ
そのふ 園生のふ倭多むは園圃とこのふとこのふといひし俗に園と
園と音して移せり

そのと 神代紀は須飲をよりり園後のふは据也人死しといふも葬らして
藏めむるふはつり

そのかゝ 昔時たよりり禁河さふ久代をよりり名上のふよせといふめし
○當時をよりりふよりり昔の事といひしを付と指の初よりりといふり○を
石よふてふ酒よりりふさすのひらつてハセり

○う川不物候は昔時よりりふ奇
そおつといふりけしそのぬめしとけふのふ根といふ

其髪は箱のふぬ在昔もあふとせり神代紀は真髪箱掃指田姫よりぬり
△その 嶮岨をいひ背端のふめし一野曲達菜山といふがとていふ海島といふ
乃かそいふてよりり或ハ岬をよりり初のはもそふぬてぬし一のゆく而
をいさくろ宥の壁ふちはくとていふり家乃かそていふこと也○指貫乃
そいといひエ匠の材木の後角ぬ刺ををををよりりていふも通てり世俗は
指貫は指貫の傍よりり○佛倍をよりり式部日記はふはよりり乃
さと人をていひおくらりていふも松屋はよりりていふもかきとかなるも

それの略なり

そへ 傍側をいふ嶮岨と通つる ○蕎麥と訓をいふの三後なり
多くてもや倭名抄なりたむとていつる今々のむねといふは
後とていふも余といひ実小に後車といふも多し仁明紀は令
内國司勸種蕎麥とみづり此の記は元正紀より西は宋の時
乃用尊卑不通とて ○そと業あり野生食あり

そへ免 源氏より傍目の系 ○妻といふ傍妻の系也漢書の注は
そへえふ 松葉紙とていふ小冷以臺なり小冷はまていふ
はねわつりといふとていつる源氏よりいふはさねといふ
人といふとて猫の系といふはさねといふはさねといふは
ふいぬけといふ傍をいふなり

そへむ 我をいふむの人をいふむとていふ易は反目なり
選は賢とていふとていふ物もいふとていふとていふとて
そへい 源氏より河海は西都賦の航後といふと訓を殿角をいふ

とていふ江賦の碣磔をいふなり今の傍側も人の起りなり
嶮岨の系といふなりそへいといふなり

そへい 日本紀は川をいふ柳万葉集は川をいふの系は
乃より系なりといふ傍乃系なり ○形骸の系はさねといふ所ありと
に同一 ○倭名抄は酸とていふ新撰字鏡はさねといふ酒再下類也注を
今そんかといふとていふなり ○同書は漢類とていふ所の系は新撰字鏡は
瘦をいふなり今そいふとていふなり

そへら 日本紀は昔をいふり春平の系也一説はいふ側
そへゆ 倭名抄は新撰字鏡はさねといふけといふもいふなり源氏
人をいふとていふとていふはさねといふとていふはさねといふ
鏡は腫をいふなりといふはさねといふはさねといふはさねといふ
訓同一 ○俗は風をいふなりいふはさねといふはさねといふはさね
そへく 雲の系はさねといふはさねといふはさねといふはさね
傍幸の系はさねといふはさねといふはさねといふはさね ○新撰

字鏡よ地掬をそひくこととありて○長崎をたたり引すとそひくことひ
 そひふー 源氏よも侍寝とつかり又記の序よぬとそひふーとそひ
 ふーたり人さるぬとそひ遊仙窟は横陳をとりり本都王記は保明親王元
 服夜故元大臣時平女参俗謂副卧乎とありて○そひ終り同ー○日中
 行事そそふーけねる翁人鬼の問はたみかたてけりありとありて
 とねかり初まよとそひ子の母やむい母よそひ終のそやとありて

△そふ 漆副傍おのそふ例でりとそひふの行とそとらりり俸ハ軍陣
 小人が益をいふ又海を神代紀よとありとありて○日よそひてといひま妻
 法道とありていふ記のそあり神代紀よも又遊仙窟は隠徒をいありて○
 古今集乃序よなをそとてつる八月とそふ對をねきそとてこのそふと
 風俗のそめとありて○團茶よつと頂字とありて

△そふ 古今集初の五文字よとそふとそとそとそとそとそとそとそとそと
 そねとていふ初まりとありてとそと通つ後撰集よりそとそとそとそとそと
 字也著同集よとそとそとそとそとそとそとそとそとそとそとそとそと

人のお中時よ領はとそひ俗をいといといとそねとていふとありて

そとそと 古今集の序よも日本紀は調歌はとありて玉篇は風譬言喻也
 とつるはとそとそとそとそとそと

△そふ 神代紀は緒とありて小史丹のそとそとそとそとそとそとそと
 ○古事記三輪乃故事よ以赤土散床前といつたりとありて後世巫祝家
 けとて鬼顔公格乃用とあり

そとつ 案山よいといふ田はたそとそとそとそとそとそとそとそと
 又川の山田乃そとつとそとそとそとそとそとそとそとそとそと

古事記よ久延彦者於今者山田之富富騰者也此神足雖不行而尽知天下之
 事神也といふとありてとありて同音通つたり肥前よとありてとありて河内よとありて
 とありて上野よとありて信濃よとありてとありてとありてとありてとありてとありて
 とありてとありてとありてとありてとありてとありてとありてとありてとありて
 国陽川といふとありて傳記全履

山田とそとつる乃身とそとそとそとそとそとそとそとそとそとそと

傳、乃昔そつふ近きなりては、いふ也。先獨菴稿よそふの、
よき起つてつと膠也。一後、山田の、
秋田、乃、
後、
弘仁九年六月、
鴉、
そ、
神、
そ、
つ、
△、
そ、

傳、乃昔そつふ近きなりては、いふ也。先獨菴稿よそふの、
よき起つてつと膠也。一後、山田の、
秋田、乃、
後、
弘仁九年六月、
鴉、
そ、
神、
そ、
つ、
△、
そ、

傳、乃昔そつふ近きなりては、いふ也。先獨菴稿よそふの、
よき起つてつと膠也。一後、山田の、
秋田、乃、
後、
弘仁九年六月、
鴉、
そ、
神、
そ、
つ、
△、
そ、

乃故事也... 右の事なるべしと云り

詐病をうつるるべしと云り

みづろとの不れふおしく入らぬと云り

此致全漸兵制録に云り

神代紀に虚室見日本國と云り

かりて事記に天津日高乃子虚津日高と云り

さねいさめこの略俗語なりと云り

さねいさめぬかり

度乃而まきさういふは夕立のさういふげふくと云り

さういふは夕立のさういふげふくと云り

張也割をよしの顔會曲かといふと云り

新に越旅人といふのさういふと云り

雪車雪舟... 漢書に... 所業といふ... 漢嵐拾葉... 文選乃点... 神代紀に... 爾は... 夫然也... 並の辨... それが... 某は... 白もの...

とんえ集韻よ通依ねよとてつとて ○祝詞式よ其申と書りし同一や
 め一西はのちよもる用ななり申し人なりいさや漢唇よ長子建次子
 甲次び次慶師古曰史失其名故云甲乙耳非其名とてとて

△そろ 候とよなりさつよふの急語也埃囊鈔消息よ人の河子書ふれ
 て何候と云ハ礼也云々なり人の公ふ合ふや否や侍候とてとて

全浙兵制と裁とる小寺にいとつりつり ○素羅の白と先文のよせ也
 ろろふ 整齊と読りそろふとていふへるふと揃を注に不ふあり ○壘囊抄

小沙汰といとぬそろふといは選也つりふとそろふとそらふとそらふと
 そろく 急とぬるよつり整いといとつとてそらつりつり全浙兵制り

安挑と譯とる猪ののころあり徐ののころあり看とてつり譯と
 △そろり そろり乃下

△そのわ 口語より所為り音也

△そを 源氏よそをのさかひといふ諸衛の義也

倭訓栞前編十三終

安永六丁酉之歲九月吉日發行

東都 須原屋茂兵衛

書肆 山本平左衛門

京師 出雲寺文次郎

風月莊左衛門



